

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K18056

研究課題名（和文）幼児期の遊びにおける学習プロセスの構造化に関する研究

研究課題名（英文）A study on the structuring of learning processes in early childhood play

研究代表者

内田 祥子 (Uchida, Sachiko)

高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授

研究者番号：60461696

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スウェーデンの幼児教育における、学習者側の理解や能動的な意味形成を重視し、それを引き出すには教師による介入が欠かせないと考えるアプローチの理論的枠組みを整理し、日本の幼児教育における展開可能性を検討することを目的とした。文献検討を通じて、Listening pedagogyの中心的概念であるドキュメンテーションにかんする理論的整理をおこない、日本の幼児教育における位置づけとの差異を明らかにした。また、日本の保育施設における実践研究を通じて、日本の文脈に依拠したアプローチの展開を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年は、国際的な幼児教育において均質化や就学準備性を高める傾向が強まっている。このような状況のなかで、多様性や複雑性は捨象されやすい。プレイショップと呼ばれる実践研究サイトでの検証を通じて、子どもの権利や民主性を中心に据えた幼児教育アプローチの展開可能性を、日本の幼児教育の文脈に位置付けながら、理論的のみならず実践的に検証した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the early childhood education approach that emphasizes meaning-making for learners based on the Listening pedagogy in Sweden, and examined the possibility of development in early childhood education in Japan. Through a review of the literature, we confirmed the framework of documentation, which is the central concept of Listening pedagogy, and clarified the difference from its position in early childhood education in Japan. We also examined the development of an approach that relies on the Japanese context through practical research in early childhood education facilities in Japan.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児 遊び Listening pedagogy プレイショップ レッジョ・インスパイア ド 構造化

1. 研究開始当初の背景

OECD (2006) は国際的な幼児教育を、知識や技術の獲得をゴールとする「就学準備型」と、教育とケアの一体的な関係のなかで「意味生成 **sense-making**」とその副産物としての学習を重視する「ホリスティック型」に区別している。日本の幼児教育においては、幼児の自発的な活動としての遊びこそが、「心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である (幼稚園教育要領, 2008)」とし、「遊びを通しての指導」を強調してきた。それは就学後の教育につながるような達成目標ではなく、ケアと教育との一体的な関係のなかでの包括的な経験と内面の育成を目指しているという意味で、ホリスティック型に位置づけられる。しかしながら、教師が実際に遊びにおける学習プロセスをどのように構造化するのかについての詳細な議論はほとんどなされておらず、多くの保育現場において、いわゆる「自由遊び」の時間に保育室にブロックを出すだけというような素朴な環境構成が中心となっている現状がある (尾木他, 2015)。

ホリスティック型のカリキュラムを長い間実施してきたスウェーデンでは、背景に **social pedagogy** という共通の思想をもちながら、以下のような多様な教授法を発展させ、それぞれの効果が実証的に検証されてきた。

子ども中心型 (放任型) アプローチとは、ピアジェの発達理論やフレーベルの「自由遊び」の思想に基づき、大人による介入は最小限にとどめられ、幼児の現在の発達段階に合わせた活動を重視する、スウェーデンのプレスクールの多くが取っているアプローチである (Fleeer, 2011)。教師 - 子ども協働参加型アプローチは、学習者側の理解や能動的な意味形成を重視し、それを引き出すには教師による介入が欠かせないと考えるアプローチである。その理論的背景には、教師による環境設定を通じて、「今は大人や仲間の援助の下でしか課題の解決はできないが、やがては独力で解決可能となる可能性の領域」、つまり発達の最近接領域 (Vygotsky, 1933) を生み出すことが重要とする考え方がある。それは、大人が子どもの発達に先回りして「足場かけ (scaffolding) (Wood, Bruner & Ross, 1976)」をおこなうという、1970 年代に展開されてきた発達の最近接領域に対する理解とは異なり、あくまでも子どもの自発的な興味を起点としながら、大人が持続的な探索へ導く点に特徴がある。教師主導型 (教え込み型) アプローチは、学習者側の能動性はほとんど考慮に入れず、教師が一方向的に学習過程を方向づけるアプローチである。このアプローチはスウェーデンにおいては少数派である。

OECD (2004) は、論理的思考と発達心理学の実証研究に重きを置いているハイスコープと、自由な共同的思考と伝統文化を重視するレッジョ・エミリアやテ・ファリキに対し、包括型保育に就学準備性の側面を両立させた「教師 - 子ども協働参加型アプローチ」によるスウェーデンカリキュラムが子どもに最も利益をもたらすと述べ、高く評価している。この「教師 - 子ども協働参加型アプローチ」をめぐるのは、近年、北欧や欧米を中心に、発達の最近接領域の創出における教師の介入の仕方について新たな議論が展開されている。Variation theory や Developmental pedagogy においては、教師は学習者と環境を媒介する役割を担う。学習者の自発的な興味は、そのままではやがて消失してしまい、持続的な探索には結びつかない。したがって教師は、学習者の興味にそったテーマを定め、学習対象の特定の側面をハイライト化 (Lynvch, 1990) することで、学習者と環境とをつなぎながら学習プロセスを構造化する。一方 Listening pedagogy や Lindqvist (1995) の実践においては、学習者によるアートを中心とした様々な表現や意味生成が重視される。教師は学習者の興味や創造性を引き出す豊かな文化的資源を用意することで子どもの自発的な探索を促しつつ、子どもが生み出した物語や作品に耳を傾けることによって、学習対象を明確にしていく。

2. 研究の目的

本研究は、スウェーデンにおける「教師 - 子ども協働参加型アプローチ」の理論的実践的状況を整理するとともに、日本の幼児教育現場での実践研究を通じて、教師が子どもの遊びをどのように構造化することが重要なのかを検討し、日本に固有の課題や実践の展開可能性について示唆を得ることを目的とした。具体的には日本の幼稚園で遊びのワークショップ (プレイショップ) を現職の教師と協働で実施することにより、日本の状況に根差した理論化を目指した。

3. 研究の方法

研究は 研究会等による文献検討を通じての理論的整理と 日本の保育施設でのフィールド調査によって進められた。

については、「教育と保育の理論と実践についての研究会」 (Theory and Practice in Child Education and Care)、略称 TPCEC を立ち上げ、月に 1 回の頻度で定期的に開催した。スウェーデンの幼児教育思想や近年スウェーデンの保育に大きな影響を与えているレッジョ・エミリアの幼児教育思想について文献講読を進めながら理解を深める場を設定した。この研究会には、研究者のほかに保育や教育の実践者も参加し、理論的検討を進めるとともに、それぞれの実践現場での新たな試みや実践展開についても共有し、理論と実践の相互的な発展の場を構築した。また、スウェーデンの研究者との研究交流および国際シンポジウムを実施し、研究の発展に必要な最新の知見を得た。2017 年 10 月には、スウェーデンのヨンチョンピン大学准教授である Monica

Nilssen 氏と「国際児童青少年舞台芸術協会」に所属する子ども劇の演出家 Bernt Høglund 氏を立教大学に招聘し、国際シンポジウム「ポストモダンからみたスウェーデンの就学前教育における学習、遊び、アート」を開催し、司会を務めた。また、Monica Nilssen 氏と Bernt Høglund 氏を高崎健康福祉大学に招聘し、研究交流を深めた。

については、日本国内の幼稚園において遊びのワークショップ(「プレイショップ」と呼ぶ)を、現職の教師と協働して実施することを通じて、「教師 - 子ども協働参加型アプローチ」に基づく学習プロセスの特徴や大人のかかわりについて検討した。プレイショップの実施のためにはプラン作成、実行、振り返りが必要となり、研究者は、教師と共にそのすべてに関与して子どもの発達の諸条件の解明を目指す。教師や教師を志す学生が、研究者のたてた計画に沿って、活動を展開する。このような活動に3～5歳の幼児が参加した。プレイショップの実施後、活動時の子供の様子や教師や学生のかかわり方を検討するカンファレンスがおこなわれた。

研究計画の初期は、日本の子供たちが通う幼稚園を主なフィールドとし札幌市にある私立美晴幼稚園において、2018年からは、文化的言語的に異なるルーツを持つ子供を対象とした保育の構造化についても検討するため群馬県内にある日系ブラジル人の子供たちが通う保育施設でも定期的にプレイショップを実施した。こうした実践研究の背景には 5thD 実践(Cole, 1996)を実施してきたカリフォルニア大学サンディエゴ校の比較人間認知研究所(LCHC)の実践理念がある。

4. 研究成果

スウェーデンのナショナルカリキュラムとの比較にみる日本の幼稚園教育要領の課題の検討

平成29年に日本の幼稚園教育要領が、保育所保育指針、認定こども園保育・教育要領とともに改訂告示された。日本も欧米を中心とした国際社会と同様、主体的学び(アクティブ・ラーニング)にもとづく理論を採用しつつ、就学準備性を高めることで、知識基盤型社会に向けての方向性を示そうとしている。しかしながら、日本が重視してきた包括型の保育を維持しつつ教育目標や評価の明確化をはかるといふ課題は、容易に解決のできない側面を多々含んでいる。

内田(2019)は、上記のような課題に先陣を切って取り組んでいるスウェーデンの状況と日本の幼児教育との比較検討をおこなった。その結果、新幼稚園教育要領には、レッジョ・エミリアに基礎づけられたドキュメンテーションと呼ばれる記録方法やプロジェクトと呼ばれる子どもの主体性を重視した保育形態を推奨する記述が盛り込まれていること、しかしレッジョ・エミリアの民主的価値を重視する思想に依拠するこれらの概念が日本の保育状況にどのように位置づけるかが十分明らかにされているとはいえないことがわかった。それに対しスウェーデンでも、ナショナルカリキュラムにストックホルム大学のグニラ・ダールベリが起草にかかわるなどレッジョ・エミリアの教育思想を取り入れる動きが確認できる。そこには Variation theory や Developmental pedagogy に基づき教師が学習者と環境を媒介する役割を担う伝統的な幼児教育法と、レッジョ・エミリアの思想に依拠する Listening pedagogy とをせめぎあわせながら、スウェーデンに固有の新たな幼児教育方法を創出しようとしている文脈化の過程があり、日本との重要な差異を指摘できる。日本の幼児教育においては、そうしたスウェーデンの姿勢に学びながら、一体的なカリキュラムをデザインする必要性が示唆される。

ドキュメンテーション概念の理論的整理

スウェーデンにおける「教師 - 子ども協働参加型アプローチ」はレッジョ・エミリアの思想に依拠する Listening pedagogy を通じて発展している。ドキュメンテーション(documentation)はこうしたアプローチにおける中核的な概念である。ドキュメンテーションにおいて教師は、子どもたちの小グループにおけるプロジェクトの活動を、メモ、絵、レコーダー、ビデオ、カメラなどを用いて記録する。そしてその記録を焦点化してパネルや映像記録を作成する。その過程は、教師にとっては省察とカリキュラムデザインの過程であり、子どもにとっては自らの経験を再訪しその意味と価値に気づく過程である。さらにパネルや映像は親や地域の人々に公開され、学校に関わる者のアイデンティティを形成する。

近年日本国内でもドキュメンテーションが普及しつつあるが、思想的背景から切り離されて、単なる教育的ツールの一つとして取り入れられていることも少なくない。この概念の背後には、すべての子どもは力強く、豊かで、生まれた時から学ぶ意欲があり、想像力に満ちているという子ども観、対等性に価値をおく民主的な思想がある。その学びはプロジェクト(プロジェクト)と呼ばれる共同的な探究と、多様な媒介による表現の活動において展開される。ドキュメンテーションによる評価は、あらかじめ定められた目標や指標に即して子どもの学習を査定するものではないし、個人であるかグループであるかにかかわらず、子どもの発達や変化を照準するものでもない。出来事への価値付与と意味付与を通じて、中立を装うアセスメントへの「抗体」あるいは「解毒剤」となり、民主主義の行為となる(浅井, 2019)。

TPCEC等の研究会では、継続的にレッジョ・エミリアの思想にかかわる主要な文献を読み進め、概念理解を深めると同時に、日本の幼児教育の文脈にどのように位置づけることができるかを議論した。また、その成果は、日本保育学会での自主シンポジウムによって報告された。

1) 対話資源としてのドキュメンテーション

一般的に保育における記録行為は、教師が言語媒体によって事後的に子どもや自らの行為を書きとどめる行為を指し、その日の子どもの姿や援助を振り返るうえで重要な営みだとされる。しかし教師個人の内省を通じて行われるため、教師が自身の想定を超えた子どもの姿を捉え理解を深めることは難しい側面がある。子どもをより良く理解したいという願いをもっておこなう記録行為が、教師の想定に子どもがどう応えたかを評価することに置き換わってしまい、子どもの姿から却って遠ざかってしまうというジレンマに悩む教師もいるだろう。一方、レッジョ・エミリアの幼児教育実践のツールとして知られるドキュメンテーションは、学びの過程で利用され経験を構成する不可欠な一部とされる。リナルディ(2019)は、記録という行為を通して、記録者の思考は「モノ」の形をとり、多数の解釈者によって知り直されると述べる。ここでいう記録者とは、教師だけでなく子どもを指す。静止画や動画、子どもによる遊びの痕跡や作品は、記録者の思考を物象化し、保育の過程に参加するすべての人の対話を媒介する資源として利用されることにより、更なる対話を拓く可能性をもつと考えられる。

2020年の日本保育学科自主シンポジウムでは、実践研究者と共にドキュメンテーション実践に取り組む現場での実践事例を取り上げ、対話資源としてのドキュメンテーションの可能性について報告する場を企画した。ここで取り上げる現場は、子どもの声を丁寧に聴きたいという願いをもち、研究者と共にドキュメンテーションの起源となる思想や子ども観を学び始めて間もない園である。このような場にドキュメンテーションが持ち込まれたとき、そこにどんな対話が拓かれるかを議論することによって、ドキュメンテーションの可能性や理論的課題を明らかにした。

2) ニューマテリアリズムによるドキュメンテーションの理解

ドキュメンテーションには、すべての多様な子どもの声を聴くことを重視する「傾聴の教育」思想が表現されている。一般的に教育の分野では、子どもの声をどのように聞き、評価するかということはアセスメントとしての評価という観点から議論されることが多い。一方、ドキュメンテーションが「価値づけ(evaluation)」としての評価を行っていることを強調し、それを意味生成と呼びつつ質評価の考えに対置したのがダールベリとその共同研究者である。彼女たちは周囲の世界に関する意味は他者との社会的な相互行為を通じて構築されるとする社会構築主義の哲学や思想に依拠してレッジョの教育実践とドキュメンテーションの理解を試み、ドキュメンテーションの倫理的側面を強調した。しかしこのような枠組みでは、言葉をもたない乳児や非人間的な存在の声を聴くことができず大人による代弁を免れることができない。結果として、質評価における脱文脈化や単純化に対抗できない。レンズ=タグチは、このような観点から構成主義、社会構築主義、そして社会構築主義を批判しつつ、ニュー・マテリアリズムの理論的立場をとった。そのことによって、リナルディの傾聴の教育学における非人間的な特徴、すなわち人に耳を傾けるだけでなく、周囲の世界に耳を傾けるという側面を焦点化した。ここにおいてドキュメンテーションは、複雑で多様な人間と非人間のアクターによる翻訳の過程の記述となる。

TPCECでは、ニュー・マテリアリズムにかかわる文献を継続的に購読し、その理論的実践的展開の可能性を議論した。

3) 子どもの多様な声を聴くこととドキュメンテーション

ドキュメンテーションは実践を省察するために使用される教師のための道具ではない。互いの声を聴き対話を拓く資源である。このような観点にたてば、ドキュメンテーションを子どもはどのように利用するのか、という問いが成り立つ。例えば子ども自身が作る砂場の造形、様々な媒体による作品も、次の対話資源になるという意味でドキュメンテーションとしての位相をもつ。

2021年には日本保育学会自主シンポジウムにて、園における子どもと粘土について考察をおこない、日本の幼児教育現場における子どもの作品の捉え方について議論をおこなった。現在保育現場で展開されている粘土実践の一つは、素材の感触そのものを楽しむ感覚運動的な遊びから始め、徐々にテーマを表現する活動を取り入れていくものである。このような実践の背後には、「自己表現」における発達を感覚的遊びのなかで偶然生まれた形を見立てる段階から事前のイメージを表象化する段階への移行と捉える認知主義的発達観がある。この枠組みにおいて、粘土は子どもの内的イメージを表象化するための素材と位置付けられる。従って素材の選択においては、加工変形のしやすさ、扱いやすさが重視されることになる。質感の変化が豊かであるが扱いにくい土粘土等よりも、粘性が高く変形が容易で保存もしやすい油粘土が使われることが多い。粘土を子どもの内的イメージを表象化するための単なる器と捉えるまなざしは、子どもと粘土との多様な出会い方を言葉で切り分けてしまう危険性をはらむ。「教師による安易な見立て」は、その一例といえよう。教師は絶えず粘土や子どもとの対話を通じて、粘土という物質との出会いを新しくしなければならぬ。粘土は、子どもとその身体、あるいは周囲の世界とを固有の仕方ではつなぐ環境資源でもある。子どもが環境資源を変形し続けるプロセスに、子どもの声を聴くことができる。このような視点から粘土を捉えた時、粘土のドキュメンテーションの位相が拓かれることの重要性を示唆した。

プレイショップの実施による実践研究

2017年9月に札幌市にある私立幼稚園にて、子どもの自発性を重視した遊びのワークショップ(プレイショップ)を設定し、遊びにおける幼児の探索活動の特徴および、幼児の探索(exploration)を媒介する教師の援助や記録の在り方について検討をおこなった。2018年度後半からは言語的文化的に多様な背景をもつ幼児を対象としたプレイショップを実施した。南米にルーツをもつ日本語を母語としない子どもたちと日本の大学生が共に遊ぶ場を月に1回程度設けた。Listening pedagogy や Lindqvist(1995)の実践においては、学習者によるアートを中心とした様々な表現や意味生成が重視される。教師は学習者の興味や創造性を引き出す豊かな文化的資源を用意することで子どもの自発的な探索を促しつつ、子どもが生み出した物語や作品に耳を傾けることによって、学習対象を明確にしていく。このような理論的枠組みを参照し、子どもが積み木や音などの多様な媒体を用いて自己を表現できる活動を設定した。言語を介在させずとも、子どもたちの遊びや対人関係における能動性を引き出し、意味生成を実現させるための援助や教師としての発達条件を検討した。

実践研究のデザインに関しては、毎年カリフォルニア大学で開催される大学と地域の協働による研究プロジェクトについて議論したり情報共有をおこなう University Community(UC) Links Conference に参加し、実践研究の進め方について成果報告をおこなうとともに、実践的、理論的展開における知見や助言を得た。

(1) 多文化プレイショップにおける協働演奏の微視的分析

言語的文化的に多様な背景をもつ子どもたちは、滞在社会の優位言語を第一言語としないため、その社会的能力を十分示すことが出来ない。これによって学力だけでなく、自尊心も低くなりがちである。蓮見・内田・石黒(2020)は、幼児に対する遊びのワークショップである「多文化プレイショップ」において、日系ブラジル人の子どもたちの音を介した協働活動をおこない、そこでのファシリテーターと子どもたちの相互行為を微視的に分析した。その結果、音を介したやりとりは優位言語の特権性を下げ、子どもたちの「対話」を豊かにし、その社会交流能力の高さを顕在化させることが示唆された。通常対話的關係は言語的な相互行為において着目されることが多いが、対話空間は言語媒体を常に求めるものではない。むしろ、それによって人間が持つ豊かな対人的社会的能力を覆い隠すことさえあるだろう。子どもたちは他者の声を受けて、自分の声と対峙させ、自らの声を発することができていた。それは子どもたちが他者の声をただ普及させるのではなく、他者の声をしかるべき文脈に位置付け、それに対して自らが「どんなことを考え、感じているのか」を他者に示す力をもつことを意味していた。

(2) 言語的文化的に多様な背景を持つ子どもとの遊びにおける傾聴過程の記述

内田(2021)は子どもが周囲の世界に対して見出す固有の意味や価値、すなわち彼らの「声」を捉える視点として生態学的観点にたち、教師を志す学生が言語的文化的に多様な背景を持つ子どもの声をどのように傾聴(Rinaldi, 2006)したかを記述し、その特徴を明らかにすることを目的とした。子どもの「声」に対する表象主義的な見方を避け、子どもの固有の「声」をとらえる視点として、人が生活のなかで見出す意味や価値が、人間の頭の中で構成されるのではなく、環境にあらかじめ存在しているとする生態学的観点(Gibson, 1986; Reed, 1996)がある。この視点にたてば「声」は、生体と周囲の物理的環境との接触を通じて立ち現れてくるといえる。多文化プレイショップと呼ばれる大学と日系ブラジル人によって運営される保育施設が協働で実施する実践的研究サイトでおこなわれた、積み木を用いた遊び事例に焦点をあてた。相互行為の詳細な展開を検討するため、学生と子どもの中で相互行為が最も長く継続していた遊び場面を取りあげ、事例検討をおこなった。積み木を介して、(1)両者の間にどのような相互行為パターンが形成されたか、(2)またその過程で積み木という環境資源がどのように利用されたか、という2点を検討した。分析の結果、共通の言語的文化的基盤がなくても、学生は子どもと環境資源を介して声を聴き相互性を深めていたことがわかった。それは、大人が子どもの独力ではできないことを捉え達成できるよう援助するだけでなく、相互行為過程に内在する子どもの行為の意味を捉え、彼らの個別具体的な声を尊重することを含むものだった。このような傾聴の特徴は、環境資源を介した微細な相互行為の変化によって捉えられるものであり、生態学的観点から記述をすることの意義を示唆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 蓮見絵理・内田祥子・石黒広昭	4. 巻 2
2. 論文標題 言語的文化的に多様な子どもとの対話：音を使った即興演奏過程の微視的分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本哲学プラクティス学会編 思考と対話	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蓮見絵里・内田祥子・石黒広昭	4. 巻 vol.1
2. 論文標題 言語的文化的に多様な子どもとの対話：音を使った即興演奏過程の微視的分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思考と対話	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 内田祥子	4. 巻 14
2. 論文標題 スウェーデンにおけるナショナル・カリキュラムとの比較にみる新幼稚園教育要領の課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 健康福祉研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田祥子	4. 巻 22
2. 論文標題 保育者を志す学生は多様な文化的背景を持つ 子どもの「声」をどのように聴いたか 多文化プレイシヨップにおける遊び事例の生態学的記述	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルド・サイエンス	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Sachiko Uchida
2. 発表標題 Annual report of Multicultural Playshop: Play-based university-community collaboration for Japanese Brazilian preschoolers in Gunma, Japan.
3. 学会等名 University-Community Links 2020 International Conference, online (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白石淑江、井上知香、最上秀樹、米川香織、石黒広昭、内田祥子、
2. 発表標題 保育にとって記録とは何か -日本の保育はReggio-inspired Pedagogical Documentationから学ぶことがあるのか
3. 学会等名 日本保育学会（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sachiko Uchida
2. 発表標題 Preschool Teacher's Training of Children with Diverse Linguistic and Cultural Backgrounds: A Content Analysis of Student's Reports in the Afterschool "Multicultural Playshop" Program.
3. 学会等名 EECERA (European Early Childhood Education Research Association) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachiko Uchida, Eri Hasumi
2. 発表標題 ISESAKI MULTICULTURAL PLAYSHOP for Japanese-Brazilian preschoolers in Gunma, Japan.
3. 学会等名 UC (University-Community) Links Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sachiko Uchida, Eri Hasumi, Yuko Kawashima, Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 ANNUAL ACHIEVEMENT REPORT OF THE POWER OF DIVERSITY PROJECT:
3. 学会等名 UC (University-Community) Links Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田祥子
2. 発表標題 多文化プレイショップにおける言語的文化的に多様な子どもたちとのブロックを介した遊びの微視的分析
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田祥子
2. 発表標題 言語的文化的に多様な子どもたちの協働即興演奏の微視的分析
3. 学会等名 日本発達心理学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachiko Uchida, Eri Hasumi, Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 Multicultural Playshop: Play-based university-community collaboration for Japanese Brazilian preschoolers in Gunma, japan
3. 学会等名 University-Community Links 2019 international conference(国際学会) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田祥子, 蓮見絵里, 石黒広昭
2. 発表標題 言語的文化的に多様な子どもたちの協働的即興演奏の微視的分析
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石黒広昭, 岡田猛, 池内慈朗, 小林由利子, 内田祥子, 眞壁宏幹, 高木光太郎
2. 発表標題 アートは学校を変えるか
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田祥子, 石黒広昭
2. 発表標題 幼児は過去のドラマ遊び体験をどのように描くのか(3)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田祥子, 石黒広昭
2. 発表標題 幼児は過去のドラマ遊び体験をどのように描くのか(2)
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田祥子, 石黒広昭
2. 発表標題 幼児は過去のドラマ遊び体験をどのように描くのか(1)
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 内田祥子, 石黒広昭
2. 発表標題 幼児は過去のドラマ遊び体験をどのように描くのか(2)
3. 学会等名 教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田祥子, 石黒広昭
2. 発表標題 幼児は過去のドラマ遊び体験をどのように描くのか(3)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田祥子・鮎澤裕子・白石淑江・井上知香・石黒広昭
2. 発表標題 ドキュメンテーション実践の理論的展望と課題 イメージ媒体を用いた子どもの参加
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅井幸子・白石淑江・井上知香・内田祥子・鮎澤裕子・川上りえ・石黒広昭
2. 発表標題 子どもの表現とドキュメンテーション 子どもは粘土という言語をどう使うか？
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sachiko Uchida
2. 発表標題 Early childhood education(ECE) teacher 's training program of ISESAKI MULTICULTURAL PLAYSHOP in Gunma, Japan.
3. 学会等名 UC (University-Community) Links Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石黒広昭, 漢幸雄, 衛紀生, 坂崎裕二, 澤村潤, 森さゆ里, 西川信廣, 林英樹, 深澤伸子, 舘岡洋子, 常田景子, 本堂晴生, 渡辺貴裕, 川島裕子, 内田祥子, 宮崎隆志, 大島広子, 佐藤茂紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 232
3. 書名 街に出る劇場	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関